

杉原幸子
Yukiko Sugihara

六千人の

命のビザ

【新版】



Visas For 6,000 Lives

杉原幸子

Yukiko Sugihara

六千人の命のビザ

【新版】



大正出版

六千人の命のビザ・新版

1993年10月1日 第1版第1刷発行
2000年8月10日 第6版第3刷発行

著者紹介

杉原幸子(すぎはら・ゆきこ)

一九一三年岩手県生まれ

著書『歌集 白夜』(大正出版)

藤沢市民短歌会会長、湘南朝日新聞歌壇

選者、神奈川県歌人会委員、短歌同人誌

『層』同人・編集委員

日本ペンクラブ会員

著者 杉原幸子

発行者 渡辺勝正

発行所 大正出版株式会社

〒151-0053 東京都渋谷区代々木2-27-8
電話 03-3374-3321
FAX 03-3374-3322
振替 00190-7-50349



印刷 誠美堂印刷

定価はカバーに表示してあります

乱丁、落丁はお取り替えいたします

六千人の命のビザ

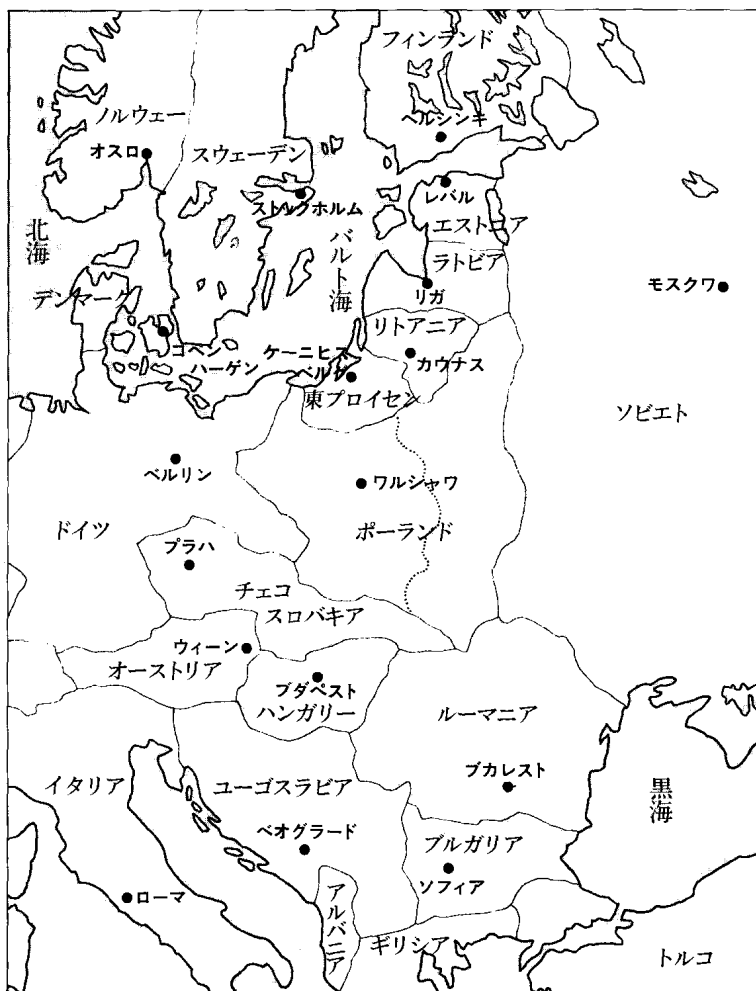
日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

装丁
松崎
鈴夢

ヨーロッパ地図 (1923年～1939年)



第2次大戦前のヨーロッパ各国の国境は1919年のベルサイユ条約に基づく。この地図は1923年に東プロイセンのメーメル地方がリトアニアに占領後のもの。1939年にメーメル地方はドイツ領となり、ポーランドは分割されドイツとソ連が領有。点線は分割線。

発刊に寄せて

杉原幸子さんのこの本に、巻頭言を書くようお勧めいただき、誠に光栄です。

彼女は、高名な日本領事であった杉原千畝氏の夫人です。海外駐在の外交官であった千畝氏は、リトアニアで一九四〇年八月に、ユダヤ教徒救出のためのビザと書類を、英断によって発給し、約六千人の命を救うという、大変功績のあった方です。

幸子さんは千畝氏の素晴らしい行動を信頼していました。そしてフィンランド、リトアニア、ドイツ、チェコスロバキア、ルーマニアといった様々な体制の下で、不安だったことや幸福だったこと、また生命の極限状態に追いつめられ、苦難に遭遇したことなどを、忠実に描写しておられます。

日本が敗れ、破滅して戦争が終ったとき、杉原一家はルーマニアにいました。そして気の遠くなるような日本への帰還の旅と、それに続く千畝氏の日本外務省からの突然の解雇とが、鮮明に書かれています。幸子さんはその性格の強さによって、これを耐えぬ

いてきました。しかし、千畝氏が救った人々による感謝の念は、残念ながら十分とは言えないものであり、相応にお礼を示すことができませんでした。

自由と安全のためのこれらのパスポートの発給を、日本の外務省は公式には認めていませんでしたが、一方ではユダヤ人について研究を続け、皮肉にも、その文化について好意的な報告をしていました。そして度重なるナチスの要求にもかかわらず、上海その他、極東にいたユダヤ難民を、ナチスのもとへ引き渡しませんでした。

本書は、世界のユダヤ人社会で高く評価されている杉原千畝領事の、英雄的博愛主義による歴史の記録です。

一九九三年八月六日

エドモンド・ロスチャイルド卿

(英国ロスチャイルド家当主)

目次

ヨーロッパ地図——3

発刊に寄せて——4

序にかえて——8

第一章 逃れてきた人々

1. 肌寒い夏——14

2. 夫の苦悩——25

3. 覚悟のヒザ発給——35

4. 運命の地——43

第二章 華やかなヨーロッパ

1. 出会い——50

2. 船出——57

3. 白夜の国——62

第三章 暗雲の広がり

1. モルダウ河の流れ——72

2. 世界を驚かせた小さな島——79

3. ベルリンの変貌——86

第四章 敗戦の予感

1. 笑いを忘れた王様——94

2. 煙幕下の逃走——103

3. 砲撃の中で——113

4. 敗れた国の外交官——121

第五章 囚われの身

1. 不安な日々——128

2. 果てしない旅——133

3. 希望——139

第六章 祖国の苦い土

1. 辞職勧告——148

2. 第二の人生——156

3. 遠く離れて——163

第七章 再会

1. 突然の電話——170

2. 黄金の丘——176

3. 世界中の友人たち——185

4. すり切れたビザ——189

あとがき「終らざるドラマ」——199

杉原千畝に関する外務省記録——205

杉原千畝年譜——215

杉原千畝の顕彰——223

国会における質疑応答——226

人道の丘公園の建設——228

リトアニアとの交流——236

杉原千畝記念館を——238

序にかえて

ある日、アメリカのハリウッドから手紙が来ました。「杉原さんの話を映画にしたい」アメリカに来て当時の詳しい話をしてほしいということです。私はそれまで何となく書きかけていた私たち家族の経験した話を、完成しなければならなくなりました。もう五十年前の第二次大戦の話です。四年前に亡くなった夫が書き残してあった数枚の手記を整理して、記憶をたどってみることにしました。

「それは例年バルト海沿いの北欧諸国では珍しくない季節の早い、夏も終りのようなどんよりした日であった。忘れもしない一九四〇年七月中旬のことであった。

六時少し前、表通りに面した領事館の門前が、突然人の喧し^{やかま}い話し声で騒がしくなり、意味の分からぬわめき声が高まった。人数が増えるためか次第にその声は激しくな^{うか}ってゆく。私は急いでカーテンの隙間から外を窺^{うかが}った。何とそれは、大部分が乱れた服装をした老若男女の群れで、いろいろの人相の人々がざっと、百人近くも領事館の鉄柵に寄り、争ってこちらに向かって何かを訴えている光景が目映った」(夫・杉原千畝の手記より)

私の脳裏に、あの朝の光景がはっきりとよみがえってきました。リトアニアの日本領事館を取り囲んだ何百という人の群れ。疲れた様子で立ち尽くしながら、館内をのぞき込む目には、もう後には引けないという追い詰められた感じがはっきりと窺えました。そんな大人たちに交じって、おびえを隠し切れずに母親にしがみついている子供たちの姿も見えました。ポーランドから逃れてきたユダヤ人たちでした。

今、リトアニアは世界から最も注目されています。民族運動、ソ連からの独立、普通選挙など、大きく変わりつつある東欧の動きとともに、新聞やテレビを通してリトアニアのニュースが私を惹きつけます。画面に映し出されたリトアニアの人々の目に、五十年前に日本領事館を取り巻いた人々の目が重なってくるのです。そしてリトアニアの街並みは、私たちが暮らした頃とあまり変わることなく残されているようです。しかし、それまでは日本ではほとんど話題にさえならなかった国でした。(3頁「ヨーロッパ地図」参照)

私たち家族がリトアニアへ向かったのは、一九三九(昭和十四)年八月末のことでした。夫のリトアニアへの赴任に同行していったのです。当時、夫の杉原千畝は外交官としてフィンランドの首都ヘルシンキの日本公使館にいました。そこに突然、リトアニアの首都カウナス(現在の首都はビリニュス)への転勤命令が出されました。リトアニアがまだ独立国だった時のことです。身の回りのものを手早くまとめての、あわただしい引越でした。

この直前に、ヒトラーの率いるドイツとソ連との間で独ソ不可侵条約が結ばれたわけです。

しかし、これには秘密条約がついていました。その内容はドイツとソ連によるポーランドの分割とバルト三国のソ連邦への併合がそれです。秘密条約の締結から十日もたたないうちに、ドイツ軍がポーランドに侵入しました。第二次大戦の開始とともに、私たち家族のリトアニアでの生活が始まったのです。そして、翌年春にはソ連軍がリトアニアに入ってきました。とても激しい市街戦があつたわけではありません。あつたのかもしれませんが、私たちのところには届きませんでした。街角にソ連兵の姿が見かけられ、日を追うごとに、その姿が目立つようになりました。それは静かで、それだけに不気味な毎日でした。朝、目覚めるたびに、何ごともしなければいいがという思いがよぎる日常だったのです。

あの夏の朝も、そうして始まりました。夫はユダヤ人たちの置かれている窮^{きゆうじよう}状をすぐに理解できたようでした。

「一九三九年九月、西ポーランドに侵攻したナチス・ドイツ軍がその占領した地区の住民に對して示した狂暴^{しれつ}ぶりは、日に日にその熾^し烈さを増してゆき、そのうちでも、とり分け猶太（ユダヤ）に對する残酷さは目をそむけしむるものがあつた。それ故に、仮令^{かりに}今日のところはまだその難^{まな}を免れ得たとしても、明日のわが身はどうなるかは、誰ひとり予測できない状況にあつたので、三々五々相集うようになり、同年末頃からは、早くも北に向かつて民族移動の様相すら帯びてきた。

この民族移動の大部分は途中言語に絶する困難を乗り越えて、遠くバルチック海に臨むり

トアニアの首都《カウナス》に流れ着いた。

当時、私はリトアニアのカウナス領事館に領事として在任していた」（同手記より）

その後の約一カ月に及ぶ夫の行動を、当時の日本の外務省内では、「リトアニア事件」と呼ぶ人もいたようです。そして戦後になって、この事件は誰からも忘れ去られていきました。私たち家族の中でも、あえて話題にすることはありませんでした。ことさらに忘れ去ろうとしたためではなく、ただ「あたりまえのことをしただけだ」と夫も私も思っていたからです。

一九八九年四月、ニューヨークのユダヤ人団体の招きで長男と一緒にアメリカを訪れた折、ふと、シカゴに住んでいるゼル夫人を訪ねてみようという気になりました。手紙のやりとりは何度かありましたが、会うのは初めてでした。電話をかけると、「是非いらしてください」と嬉しそうな答えが返ってきました。翌日、息子と別れて、私はシカゴに向かいました。

空港のゲートを抜けると、ひとりの女性が近づいてきます。彼女でした。体の具合があまりおもわしくないと聞いていたので、まさか本人が迎えにきてくれるとは思っていなかったのです。驚いている私の手をとって、しっかりと握りしめました。車に乗り込んでからも、その手を離そうとはしません。ミシガン湖畔にある豪華なマンションの彼女の部屋に、私たちは手を握ったまま入っていきました。

夕食のテーブルには、ご馳走がたくさん並びました。ひとり暮らしの彼女が、自分の手で、心をこめて作ってくれたものばかりでした。ミシガン湖に夕日が美しく映えていました。それ

から私たちは、夜の更けるのも忘れて語り合いました。私の夫の思い出、彼女とご主人とのアメリカでの苦勞話、そして子供たちのこと。彼女の話すドイツ語が、私に東欧での暮らしを思い起こさせました。

「今度いちど日本にも来てください。いい所ですから」

帰りぎわ、彼女に思わずそう話しかけました。

「日本には、もう行きましたよ」

笑いながら答えた彼女の言葉に、私も笑い出しました。久しぶりのドイツ語の会話に、私は東欧にいた頃の友人に再会したような気持ちになっていたのです。

彼女は、五十年前、リトアニアの日本領事館を取り囲んだ人々の中のひとりでした。彼女の夫も、そして当時三歳だった愛娘もその中にいました。リトアニアを離れた後、彼女の家族は日本を通ってアメリカに渡っていったのです。ご主人は私の夫が逝ったと同じ頃にガンで亡くなりました。最後まで、夫と私に「会いたい、日本に行きたい」と言い続けていたそうです。

「リトアニア事件」は、この老夫婦の心の中で生き続けていたのです。

彼女たちばかりではありません。あの場にいた全ての人々の胸の中で生き続けていました。今も、その人たちから時折便りが届きます。外交官だった夫とともに、第二次大戦の最中に過ごした十年という歲月のたった一カ月の出来事が、私に多くの友人を残してくれました。

第一章

逃れてきた人々

1 肌寒い夏

一九四〇（昭和十五）年七月十八日の朝。私たちはいつもと同じように軽い朝食をとり、夫は階下に入りていきました。

夫は早起きで、夜明けの鳥の鳴声とともに起き出します。その朝も晴れていて、顔を覗かせたばかりの柔らかな陽の光が、カーテンの隙間から差し込んでいました。夏といってもリトアニアは北の国です。朝晩は肌寒く、昼でも気温は十七度ぐらいにしか上がりません。しかし私たちが起き出す頃には、領事館の中は適当な室温に保たれ過ぎやすくなっていました。

カウナスは古風な家並みが続く静かな街でした。日本領事館は丘の中腹の高台に建ち、庭から街が一望できます。一階が家族の部屋が並ぶプライベートなフロアで、半地下の階下は夫が仕事をする領事館の事務室になっていました。そして二階に使用人がいました。朝食が済むと階下に入りていき、昼食の時間に再び家族の前に顔を見せるのが夫の日課でした。

その朝も、階下に入りていく夫を見送り、私は自分の部屋に戻ると、本を読み始めました。いつも、こうして静かな午前が過ぎていくのです。本を開いて十数行ほど読み進んだ時、ノックの音がして、夫が入ってきました。